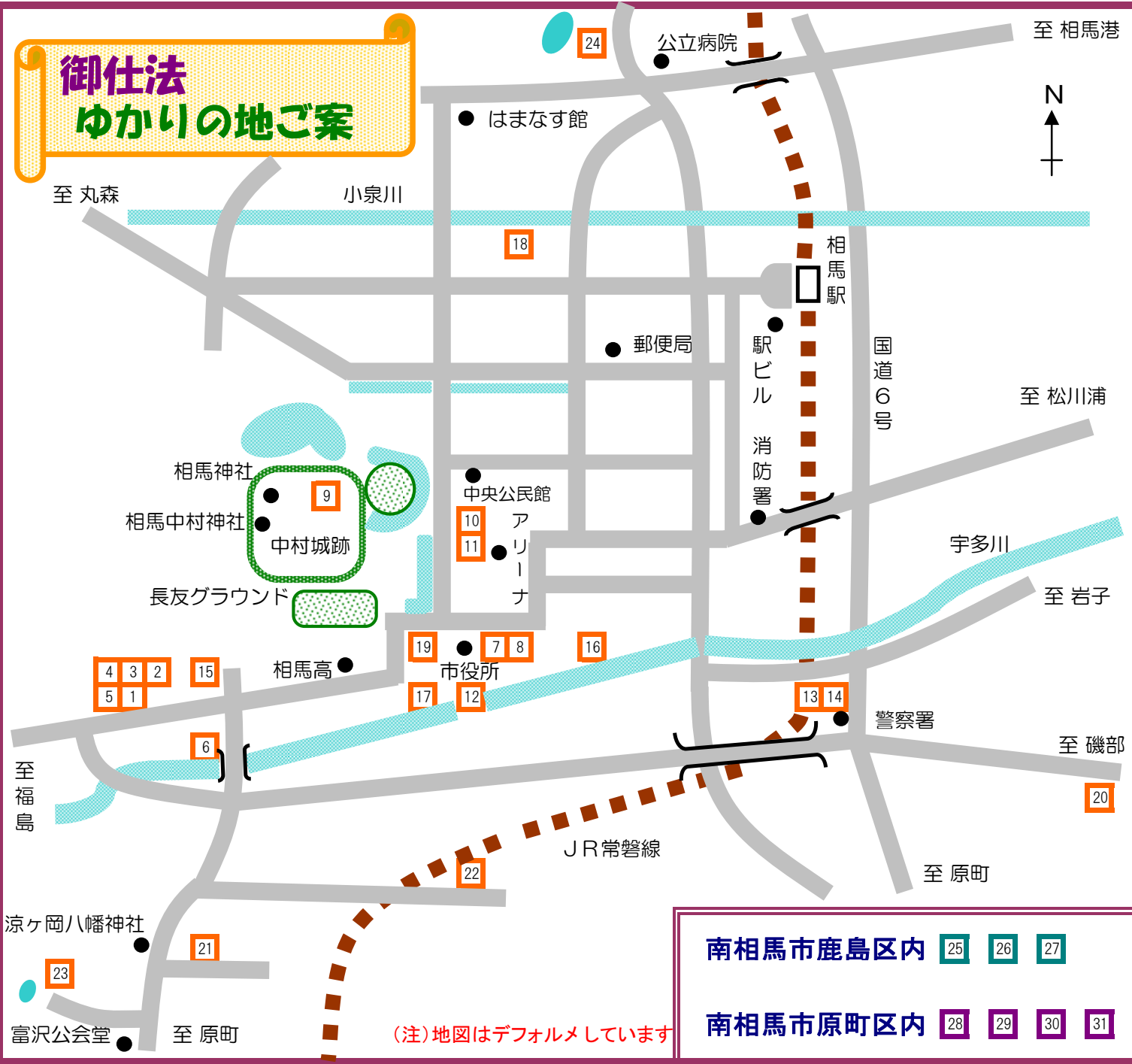


# 御仕法 ゆかりの地ご案



## 【相馬市内】

- 1 愛宕山史跡
- 2 金蔵院(こんぞういん)跡
- 3 金蔵院地蔵堂
- 4 二宮尊徳の墓
- 5 慈隆(じりゅう)の墓
- 6 清水橋
- 7 相馬市民憲章の碑
- 8 教育文化センター博物館
- 9 二宮尊徳坐像
- 10 報徳公園
- 11 尊徳『回村之像』
- 12 仕法役所跡
- 13 二宮文の墓
- 14 斎藤高行(たかゆき)の墓
- 15 草野正辰(まさとき)の墓
- 16 池田胤直の墓
- 17 熊川胤隆(たねたか)の墓
- 18 荒至重(むねしげ)の墓
- 19 中一小『二宮金次郎像』
- 20 飯豊小『二宮金次郎像』
- 21 八幡小『二宮金次郎像』
- 22 『御仕法発祥の地』の碑(成田)
- 23 宗兵衛堤(そうべえつつみ)
- 24 蛭沢堤(えびさわつつみ)

## 【南相馬市鹿島区内】

- 25 南右田神社
- 26 報徳二宮神社
- 27 唐神堤(からかみつつみ)

## 【南相馬市原町区内】

- 28 二宮家宅地跡
- 29 二宮尊徳の墓
- 30 富田高慶(こうけい)の墓
- 31 二宮家・富田家の墓

南相馬市鹿島区内 25 26 27

南相馬市原町区内 28 29 30 31

(注)地図はデフォルメしています

## 1. 愛宕山史跡



愛宕山史跡の入り口となる石段下には史跡の案内板が立っています。尊徳翁の墓をはじめ、藩の最高顧問だった慈隆が住んでいた金蔵院跡や二宮尊徳墓の遥拝所である地蔵堂など、御仕法ゆかりの史跡があり、愛宕山史跡として整備されています。

## 2. 金蔵院(こんぞういん)跡



安政3年(1856)、藩の最高顧問として迎えられた日光の僧慈隆(じりゅう)が住んでいた長松寺の別院です。慈隆が私塾を開き、最盛期には寄宿300名、通学100名を数えました。院跡には一時期尊徳の孫尊親が住んでいたこともあります。

## 3. 金蔵院地蔵堂



慶応2年(1866)藩が招いた米沢の名工・上杉主殿頭(とのものかみ)作の地蔵堂は、尊徳墓の遥拝所として墓に続く石段のたもとに建っています。

## 4. 二宮尊徳の墓



安政3年(1856)、尊徳が69歳にして今市(栃木県日光市)で亡くなった翌年(安政4年)、遺髪を埋めてこの墓が建てられました。尊徳の戒名「誠明院功誉報徳中正居士」から、墓碑には「誠明先生墓」と記されています。

## 5. 慈隆(じりゅう)の墓



安政3年(1856)相馬中村藩に招かれた僧慈隆は藩の指南役として、御仕法のよき理解者であり事業の推進に大きな役割を果たしました。明治5年東京の相馬邸で亡くなると、愛宕山にある尊徳の墓の隣りに葬られました。

## 6. 清水橋



平成元年1月に完成した清水橋の欄干の四柱には「至誠」・「勤勞」・「分度」・「推譲」の文字が彫られたモニュメントと、それぞれの意味が記された石板が取付けられています。

## 7. 相馬市民憲章の碑



市民憲章の碑は、相馬市庁舎(市役所)の前に建っています。昭和51年3月31日に制定された市民憲章には「報徳の訓えに心をはげまし うますたゆまず 豊かな相馬をきずこう」という報徳精神が条文に謳われています。

## 8. 教育文化センター博物館



昭和49年7月に開館した博物館には「御仕法コーナー」があり、二宮尊徳や御仕法に関する貴重な資料を展示しています。

## 9. 尊徳坐像



昭和8年製作の尊徳像は戦時中供出されたため、昭和38年有志が集って再建したものが、現在、中村城跡（馬陵公園）の一角、赤橋のたもとにある尊徳坐像です。

## 10. 報徳公園



コミュニティセンター前に『報徳公園』と名付けられた小さな公園があります。園内には、尊徳の訓（おし）えである「報徳訓（ほうとくくん）」を刻んだ石碑や尊徳の像などがあります。

## 11. 尊徳『回村之像』



報徳公園内にある回村之像は、180cmの大男だった尊徳が青年期、村々を回り歩いた姿です。昭和58年6月、小田原市の田島亨氏からの寄贈により、旧原町市出身の彫刻家横田七郎氏が製作しました。

## 12. 仕法役所跡



安政4年（1857）藩内の仕法拡大に伴い、対岸の反町から移転して、新たに建てられた仕法を行う公舎の跡地です。当時、30人の係員が出仕していました。

### 13. 二宮文(ふみ)の墓



尊徳の娘・文は富田高慶と結婚して相馬へやって来ると、藩士の子どもたちに手習いを教えたりしていました。出産のために帰った東郷(栃木県)で亡くなり、遺髪が高慶の元へ帰ってくると、高慶の実家の菩提寺である蒼龍寺に墓が建てられました。

### 14. 斎藤高行(たかゆき)の墓



文政2年(1819)に生まれた高行は富田高慶の甥(兄の子)にあたります。高慶と同じく尊徳の弟子となり、二宮四門弟の一人と称されました。高慶とともに藩の復興に力をそそぎ、報徳仕法の指導にありました。蒼龍寺の外墓地に眠っています。

### 15. 草野正辰(まさとき)の墓



安永元年(1772)、藩士の子として生まれた正辰は後に藩の江戸家老となります。江戸で尊徳に会った正辰は尊徳の仕法に心服し、藩の財政建て直しのため藩主や重臣たちを説得してまわり仕法の導入を果たしました。洞雲寺に墓があります。

### 16. 池田胤直(たねなお)の墓



寛政3年(1791)、代々家老職を勤める池田家に生まれた胤直は28歳の若さで家老職に抜擢されました。江戸の相馬藩邸宅と密に連絡を取り、仕法受け入れに積極的に貢献しました。仏立寺に墓があります。

## 17. 熊川胤隆(たねたか)の墓



文化10年(1813)、中村藩の重臣熊川家に生まれました。藩で報徳仕法が始まった翌々年の弘化4年(1847)に家老となり、草野正辰・池田胤直兩人に引き続き報徳仕法を積極的に進めました。円応寺に墓があります。

## 18. 荒至重(むねしげ)の墓



江戸で和算・測量・天文学を学んだ荒至重(むねしげ)は、藩に登用されると北郷代官として数多くの水利事業に精励し、御仕法を成功に導きました。歓喜寺に墓があります。

## 19. 金次郎像(中一小)



尊徳の少年像は、明治24年発刊の幸田露伴著「二宮尊徳翁」の挿絵が最初です。「報徳記」の記述「採薪の往返にも大学の書を懐にして途中読みながら之を誦し少しも怠らず」が根拠になっています。

## 20. 金次郎像(飯豊小)



以前の銅像は戦時中に供出したため、現在あるのは戦後になって再建されたものです。

## 21. 金次郎像(八幡小)



台座には「二宮先生ノ像」と記されています。

## 22. 御仕法発祥の地



相馬中村藩の仕法は弘化2年(1845)12月、成田村(1日)と坪田村(4日)(現在の相馬市成田、坪田地区)で始まりました。藩では報徳仕法のことを「御仕法」と呼んでいました。

## 23. 宗兵衛堤(そうべえつつみ)



富沢字焼切地内にあるため池です。このほかにも付近には嘉永5年(1852)~安政4年(1857)にかけて新築された御仕法のため池が点在しています。ちなみに、焼切の地名は、天保の飢きんのあと富沢地内に入植した真宗移民たちが焼き畑をして荒地を開墾したことから名が付けました。

## 24. 蛸沢堤(えびさわつつみ)



旧藩領内で御仕法の事業によって新築や改築されたため池は、全部で692カ所あります。そのうちの1つ、蛸沢堤は文久元年(1861)に完成しました。面積170ha、貯水量248,600m<sup>3</sup>。

## 25. 南右田神社



慶応3年（1867）真野川から取水し、右田村に通ずる南右田堀を完成させた荒至重（むねしげ）の功績を称え、60年後の大正10年、村人たちが至重を祭神として建てた神社です。

## 26. 報徳二宮神社



昭和26年につくられた神社で、二宮尊徳を祭神として祀っています。

## 27. 唐神堤(からかみつつみ)



寛文年間（1661～73）に造られた相馬中村藩領内随一のため池です。約200年後の安政4年（1857）5月、大雨で2度にわたって決壊した堤防を荒至重の指導のもと改修しました。動員延べ6万8100人、改修費用860両の記録が残っています。面積200ha、貯水量100万2000m<sup>3</sup>。



## 28. 二宮家宅地跡



慶応4年（1868）戊辰戦争から逃れるため江戸から移住してきた尊徳の妻と子どもたちが30年間生活していた宅地跡です。家屋は明治31年二宮家より払下げを受けて旧石神村役場として使われていました。現在は南相馬市原町区石神生涯学習センターが建っています。

## 29. 二宮尊徳の墓



尊徳の100年忌のときに、旧今市市（栃木県日光市）の報徳二宮神社にある墓をかたどって建てたもので、尊徳の遺品が埋葬されています。

## 30. 富田高慶の墓



高慶は、領内で御仕法が始まった弘化2年（1845）から、死去する直前の明治22年（1889）までの45年間にわたり51冊の日記を残しており、貴重な資料となっています。明治23年に亡くなったとき、尊徳の墓のすぐ近くに高慶の墓も建てられました。

## 31. 二宮家・富田家の墓



二宮家が藩主の用意した宅地に移住すると、富田高慶も二宮家のお世話のため、すぐ東隣りに移り住みました。旧二宮家宅地跡の近くにある富田家の墓地内には、尊徳や高慶の墓と並んで二宮家・富田家の墓があります。尊徳の妻歌子や尊徳の子尊行とその妻こう子、尊徳の孫尊親の妻モト子の墓もここにありす。